

暗い日曜日

-- Unbirth --



僕は泣いたことがない。

気がつくとい僕は一人でリビングにいて、窓ガラスを伝う雨の雫を見つめていた。半透明になってガラスに映るソファもテレビも、薄っすら灰色がかっているように感じられる。深く息をすると、肺の中にまで灰色が染みこんでいくような。

ここ数日の雨のせいか、家中の空気が濡れたような湿り気を帯びていた。湿度が高いほど空気が灰色になっていくというのは、さすがに錯覚だとわかっているけれど、それでも一歩足を踏み出すごとに水の中を進んでいくような感覚があった。少しずつ酸素を失っていくような。

そっと手をのばして窓ガラスを伝う雨に触れる。まだ小学生になったばかりの僕の手は、お父さんやお母さんのものよりずっと小さい。その手で雨の雫に触れようとすると。まるで涙を拭うように。けれどのばした指先はガラスに遮られて、雨の温度は伝わらない。

わざと足音をたてて、僕はリビングを飛び出した。そのまま順繰りに家の中を見て回る。浴室のタイルの冷たさ、台所のフローリングの固さ、玄関に敷かれた毛足の長いマットのごわごわ……足の裏は、それぞれの感触を伝えてくれる。

僕の他に動いている人は誰もいない。冷たい死体のような世界で、僕の足音だけが生きて動いている。

壁に手を伸ばし、指先でなぞるようにしながら、部屋を一つ一つ見て回る。
その時、不意に足を止めた。

誰かの泣き声が聞こえた気がしたのだ。
だから僕は、そつと壁から手を放すと、その声に呼ばれるように二階へと続く階段を上った。

——ただ、泣き止んで欲しいと思った。
たとえ、それが雨音の生んだ幻だったとしても。

目が覚めた。

気がつくとは僕は高校の図書室にいて、真紀の姿を探していた。頭の中が消しゴムをかけたようにぼんやりして、窓の外の景色もまた、煤けたようにぼやけている。息を吸いこむと肺まで灰色に染まりそうな、そんな曇天だ。いや、そういえば雨が降っている。不思議なほど音がしないから気づかなかった。図書室の中からも、何の音も聞こえない。

ぐるりと見渡すと、がらんとした閲覧室には僕以外に誰の姿もなく、ただ鉄製の書架に整列した本だけが、ホルマリン標本のように行儀よく並んでいる。

コツコツコツ。靴音をたててリノリウムの床を歩く。何をしている？ 真紀の姿を探している。今まで彼はここにいたのだから。いや、もういない。今はもう。

——今は？

ふと立ち止まって、僕は僕自身の独白に首を傾げる。それなら真紀は、今までここにいたのだろうか？ 教師からも生徒からも見放されたような、この無人の図書室に。そもそも僕はどのようにして真紀を探している？ いつから？ なぜ？

どうにも胸がざわざわと落ち着かない。背筋を這うのは寒気だろうか。ブウウン、ブウウン。どこからか蠅の羽音が聞こえてくる。同時に、胸の奥でぞわぞわと蛆虫のうごめく感覚。ちよつとでも唇を開けば、今にも中から蠅が飛び立ちそうだ。けれど、僕は死体じゃない。生きている。今はまだ。だから、ただの錯覚に過ぎないとはわかっていただけだ。

喉の奥からせり上がる吐き気は、焦燥によるものだろうか。

けれど、僕にはわからない。そもそもが馬鹿げた話だ。この場所に真紀がいるはずがない。あんなに居心地が悪そうにしていないじゃないか。書架に挟まれた長身は窮屈そうで、ここにいるべき人間ではないのだと一目でわかった。外へ駆け出そうとする足を、衝動を、無理やりねじ伏せるようにしていつも側に。ブウン。頭が重い。自分が何を考えているのか、考えようとしているのか、まるでわからなかった。そもそも、どうして僕は真紀を探しているのだろうか。ここは家の中なのに？

——兄さん。

突然の声に振り向くと、そこに弟の正人がいた。薄暗いリビングの、見慣れたソファに一人で腰かけて。

「——え？」

思わず口から出た声は、単音のまま言葉にすらならない。

はつと頬を張られた心地で瞬きをする。まるで白昼夢から覚めたような。ザアアア。ザアアア。閉じられたカーテンの向こうからは、降りしきる雨の音がする。それでも灰色の湿り気を帯びた室内は、写真のように静かだった。

そうだ、僕は高校から帰って来ていたのだった。ここは僕の家で、図書室じゃない。当然ながら真紀もいない。それなら、途方に暮れたように真紀を探し続けていたあの記憶は、ほんの一瞬の、夢のようなものだったのだろうか？

「——何してるの？」

訊ねられて、ようやく僕は僕のしていることに気がついた。ブウン、ブウン。

蠅が唸るのに似たこの音は、冷蔵庫のモーター音だ。それも聴覚を包みこむほどに大きい。僕は一人で台所に立って、ひやりと硬い冷蔵庫の把手を握っている。真っ白で巨大なその箱の、内側にあるものを覗こうと。

「開けない方がいいよ、冷蔵庫なんて」

いや、それだと夕飯をつくれぬ。お前だって何も食べられないじゃないか。

「もともと、僕は何も食べないよ」

冗談にしたって無茶がある。死人でもあるまいし。

笑って言うと、視線の先で弟はかすかに唇を歪めた。硬く凝った苦笑は、まるで失敗した苛立ちの表情のようにも見える。

「そもそも冷蔵庫は、死体をしまふための装置なんだ。家庭的に死体を保管するための、唯一の方法。魚の死骸。獣の臓器。植物の亡骸……あるものと言えば、蠅と蛆虫から遠ざけられた死体ばかりだ。たとえ空っぽだとしても、それは棺なんだよ」

「相変わらず変なことばかり考えるんだな、お前は」

「考えたのは、僕じゃない」

「え？」

「——兄さんだよ」

ぞつと背筋を震わせて、僕は不可解な息苦しさにプレザーの胸元を掴んだ。どうしてだろう。うわずるように心臓の鼓動が速くなる。肺が凍えて、息を吸いこんだまま吐き出せない。

一体なぜ、何に、誰に、僕は怯えているんだろう？

「兄さんが考えたんだ。死んでしまった体を冷蔵庫の中にしませば、冷蔵庫そのものになるんじゃないかって。その瞬間、イキモノはモノになる。もう傷つけない。もう苦しめない。もう他人じゃない。この家の一部になるんだ。それなら、ずっと一緒にいられるんじゃないかって」

それは――と声にしようとして、舌が強張る。

視界が一気に白くなり、貧血による目眩にも似たそれは、さらに白い冷蔵庫の扉を僕の鼻先へと近づける。ブウン、ブウン。耳を塞ぐように聞こえるのは、冷却機のモーター音か、それとも内臓の腐り落ちた死体の、腸で渦巻く蠅の羽音か。

唇を開こうとして、僕はためらう。ああ、駄目だ。わずかに開いた歯の隙間から、今にも蠅が飛び立とうとしている。僕が、腐敗した腹の中で飼っている蛆虫が。

「――それでも、きつと兄さんは」

そんなことは、もう忘れたんだろうけどね。